

研究所だより

第437号
2021年12月22日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ 年の始めの 例（ためし）とて

終（おわり）なき世の めでたさを

松竹たいて 門（かど）ごとに

祝（いお）う今日こそ 楽しけれ ”

『 一月一日 』 1900年（明治26年） 日本の唱歌



～ 冬来たいなば、春遠からじ ～

今年も残すところ、あとわずかとなってしまいました。暦の上では21日は、冬至（1年で1番昼が短く、夜が長くなる）です。冬の間中あたりますが、寒さはこれからが厳しくなり、本格的な冬の到来となります。また世界規模で新型コロナウイルスの新たな変異株が増加し、それぞれの国で感染拡大防止対策が取られています。今後、第6波の感染拡大が心配されますが、引き続き基本的な感染予防対策（マスク着用、手洗い、うがい、3密回避、換気）を徹底し、これまで以上に体調管理に留意して、年末年始を過ごしましょう。

（月刊日本教育 9月号）から

GIGAスクール構想 一人一台端末時代の学校づくり

第5回 端末を積極活用している学校の共通点

玉置 崇 教授（岐阜聖徳学園大学教育学部）

1. 1人1台端末を積極活用している学校

学校全体で1人1台端末活用を積極的に進めている学校（以後、積極校と表現）と、活用方法を検討している学校（以後、慎重校と表現）を数校ずつ訪問する機会がありました。そこで気づいたことですが、それぞれに共通点があるのです。

1つは、管理職の姿勢です。積極校の管理職は、さりげない会話からも、管理より活用に重点をおいていることを感じます。

例えば、端末保管庫の管理です。「この保管庫の鍵はどうされていますか」と聞くと、「鍵は閉めていません。子どもには、登校したら端末を自席に持ってきてよいと指導しています。鍵を閉めていると、誰かが鍵を開けなくてははいけません。担任の業務にすると、負担を増やすこととなります。子どもたちが、端末はとても大切な道具とわかれば、悪さをするとは思えません」と、さらっと言われます。

慎重校の管理職は、「何かトラブルが起きるとその後が大変ですから、鍵を閉めることにしていますので、端末が必要なときに鍵を開けています」といった見解を述べられます。

事情がありますので、どちらが正しいとは言えませんが、鍵をかけるのは活用度を高めることにプラス

にならないと感じています。活用頻度が異なるのは、授業での活用方法がよくわからないといったことではなく、実はこのような管理体制にあるように思えてなりません。

2. 子どもに聞くことが素直にできる先生

積極校の先生にヒアリングすると、端末活用についての考え方が導入当初とは変わってきたことに気づきます。次のようにはっきり言われた方があります。「始めは、私が知らないことを勝手にするのは止めてほしいという気持ちが強くありました。子どもたちが何をしているかわからないと不安になっていました。ところが最近、逆に子どもたちから教えてもらっています。『先生、デジタル付箋紙に書いて、みんなで読み合った方がやりやすいよ』などと、子どもたちから話し合いの方法提案もあって、なるほど！と思うことがあるのです。子どもに活用法を聞けばいいと思うようになりました」

教師がこのような姿勢であれば、子どものアイデアを授業で活かす方向に進むことは推測できます。そして、子どもからの端末活用のアイデアをもとにした授業が多くなると、子どもたち自身が学習の進め方や方法を考えることにもつながるでしょう。

教師がコントロールしようとし過ぎると、ストレスが溜まってしまいます。慎重校で次のように話していただけた方がありました。

「端末を活用するときは、先生が指示するまでは触らないルールにしています。わずかなことですが指示することが増えて精神的に負担になってしまいました。子どもたちから『今日は、端末は使わないの？』と言われると、その言葉でカッとなってしまふことがあります」

積極校の先生に、かつてはこの事例に近い状況だったと発露された後、次のように話された方があります。

「こちらを見て話を聞いている子どもでも、頭の中では何を考えているかわからない（笑う）。そう思ったら、指示無なしで端末に触れることなど気にならなくなりました」

端末活用を進める中で、子どもたちが学習の状況に応じた端末活用ができると実感したのだと思います。積極校では、「まずは端末に触れる機会を多くしよう。何か問題があれば、それから考えよう。やってみなければわからない」という考え方が土台にあると感じます。



3. 端末は「教える道具」意識が強い

慎重校から共通して感じることは、端末は「教える道具」としてのとらえが強いことです。コンピューター室で一斉指導するイメージが残ったままなのかもしれません。コンピューター室システムの良さ（販売側からは売り）に、子どもたちの端末が一斉ロックできたり、子どもの端末画面に教師の画面が瞬時に入れ替えたりできることがありました。そのときの印象があるのでしょうか。前述したように、教師がコントロールしたいという気持ちも、こうした過去のシステム活用体験が作用していると推測しています。



積極校では、コンピューター室での授業イメージと結びつく事例を耳にすることはありません。端末は、「学びの道具」という意識が定着しつつあると捉えています。

積極校で素晴らしい端末活用が次から次へとされているわけではありません。端末を活用して自分の考えを書く（紙の代わり）、他の子どもの考えを見合う（黒板の代わり）、共有シートに自分の考えを書き合う（ホワイトボードの代わり）など、些細な取組がほとんどです。こうした取組が日常化していることが、積極校の特質と言えるでしょう。自校を振り返るときの参考にいただければ幸いです。

第3回教育支援コーディネーター連絡協議会（あすなろネットワーク）☆

12月21日（火）に第3回教育支援コーディネーター連絡協議会（あすなろネットワーク）を開催しました。

講師にスクールカウンセラーの小松宏暢さんをお迎えし、『不登校の対応と理解』と題して、講話とグループ演習を行いました。

はじめに、文科省通知の不登校の定義「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いたもの」について確認する。

不登校に対する支援の目標として、不登校の要因は多様であり、どの児童生徒にも起こり得ることであるために、「問題行動」と判断しない。現状に苦しむ児童生徒とその家族に対し寄り添い、共感的理解と受容の姿勢を持つことが重要である。そして、不登校に対する支援の目標が「児童生徒が社会的に自立できるようにすること」であり、不登校の要因や背景をできる限り把握し、不登校に至った状況を理解し、寄り添うことがポイントである。

全国、高知県並びに市内小中学校の不登校児童生徒数の経年比較を見ても、年々増えている状況である。保育園も登園渋りなど状況的には増えていると思われる。

不登校の背景（要因）は、小学校では「1無気力・不安、2親子の関わり方、3生活リズムの乱れ・あそび・非行」、中学校では「1無気力・不安、2友人関係をめぐる問題（いじめを除く）、3生活リズムの乱れ・あそび・非行」が上位3項目で、1、3については共通していることがわかる。

不登校支援の初期段階として、生徒について最低限のアセスメント（見立て）、特に「経済的理由から」、「身体的理由から」、「いじめや虐待から」を行うこと。支援のポイントとして「スモールステップの心がけ」に留意し、子どもの歩幅に合わせて対応していくことも重要であると述べられました。

後半は、講師から事例①②の提起を受け、4グループに別れ、グループワークを行いました。

各グループでは、与えられた事例内容を「考えられる背景」「今後の対応・取組」「その他（感じたことなど）」の3項目について話し合いました。その後は各グループからの意見を聞き、情報共有をしました。



〔講話〕



〔グループワーク〕



〔グループワーク〕



〔ふりかえり〕

～ふりかえり～

・不登校児童生徒について分析されたものを説明していただき、とても分かりやすかったです。グループワークでは、同じような見解でしたが、みなさんの意見を聞き、見立てなど少し自信にもなりました。自校の不登校児童保護者対応を本人に寄り添い、外部相談機関とも連携して努力していきます。ありがとうございました。

・不登校のタイプを聴きながら、あの子はこの型だな、あの子は…と子どもの顔が浮かびました。各学校、教育センターにも問題を抱えて、しんどい思いをしている子ども、または保護者がいるので、1人1人に合った支援が必要だと思いました。そのためには、チームで対応する。不登校の原因ばかりを追わず、正しい見立てをし、接することを改めて感じました。ありがとうございました。

・不登校の要因のひとつには家庭があげられると思いますが、以前に比べ多様な家庭の状況が多くあり、生徒の不登校要因も事例であげられているような7つの型だけでは片づけられない、複合したりするものも多く見られると思います。それぞれに応じた適切な対応と変化や違和感に早期に気づいてあげることが大切だと改めて思いました。不登校になるきっかけや要因がつかめないケースも多くあり、難しい対応がこちら側に求められていることもあります。最後に話されていた様に支援者を孤立させないで協力する体制づくりは大切であり、みんなで同じベクトルを共有していれば安心だと思います。多様な指導の仕方や関わり方があるから、どこでも生徒のプラスのスイッチが入るきっかけにもなるのだなと思います。

2021年（令和3年）の漢字は ～「金」～

公益財団法人 日本漢字能力検定協会は、12月13日に今年の世相を漢字一字で表現する年末の風物詩「今年の漢字」を発表しました。このイベントは、12月12日の「漢字の日」に一年を振り返り、漢字の奥深さと意義を再認識していただくための活動の一環として、毎年年末に応募し、最も応募数の多かった漢字を「今年の漢字」とし、京都市・清水寺の森清範貫主の揮毫により「金」と発表されました。

応募者が選んだ理由として、「コロナ禍で開催された東京オリンピック・パラリンピックで日本人選手が多数の「金」メダルを獲得したほか、大谷翔平選手が大リーグMVPを満票で受賞するなどリアル二刀流でシーズンを通して活躍し、松山英樹選手による日本人初のマスターズ制覇、藤井聡太棋士の最年少四冠達成など、国内外でこれまで成し得なかった多くの「金」字塔が立てられたこと。そして、新型コロナウイルス関連の給付「金」などのお金にまつわる話も話題に挙がったようです。

来たる2022年（令和4年）が安心して暮らせる年であってほしいですね。



皆様おそろいにて、良き新年をお迎えください

2022年がお互いの飛躍の年で

ありますようにお祈りいたします

